

国語科

1. 高1古文指導の試み

長谷川 弘

【抄録】高1年時での古文指導はどうあるべきか、またその教材はどういったものがよいのか。こうした問題意識のもと、昨年度「補助教材」中心の授業をした。この補助教材中心の授業で、教科書を使った授業とはまた趣の違う授業実践ができた。そこで、その概要と反省、これからの課題を述べ、これからの高1古文授業の参考にしていきたい。

【キーワード】高1古文指導、補助教材中心授業、テスト工夫、補助教材作り

I まえがき

高校1年の古文の指導はどうあるべきか。――毎年、高校国語教師として迷う問題であろう。筆者が高校生であったときの「古文落ちこぼれ体験」を振り返ってみても、いかに高校1年の「授業の進め方」が大切か身にしみて思う。

これは昨年度行った高1古文授業の実践報告である。ほんのささやかな試みであり、また問題点も多く残してはいるが、この実践をきっかけに新たな授業作りを目指していきたいと考えている。

II 昨年度古文授業の概要

1 補助教材中心の授業

昨年度古文の授業としては教科書をほとんど使わなかった。これは筆者自身としても初めての試みである。筆者の前任校での高1での古文授業の流れは、まず1学期に「動詞・形容詞・形容動詞」を徹底的に暗記させた。だから1学期の間はほとんど古文の文章そのものには触れ得なかった。ようやく2学期から文章に入った。

しかし、本校ではその方法は向いていない。本校の生徒は非常に学力差があるため、そうした方法では授業についてこられない生徒が多いからである。

そういう理由で、筆者は本校に赴任して以来、高1での授業は、教科書の文章にそってあまり文法的な説明をせず、ゆっくりとした授業をしてきた。

が、今回は趣向を改め、ゆっくりとした授業、誰でもついてこられる授業ではありながら、高1の段階で受験に耐えられ、おおよその文法的な知識を身に付けられるそんな授業を目指してみた。その第一の方法が補助教材を使っただけの授業であった。

使わせてもらった補助教材は「国語Ⅰの演習古典編―明治書院―（以下、『演習』）」と「古典文法基礎レッ

スン―中央図書―（以下、『レッスン』）」である。これについてはまた後で述べたい。

2 年間計画

だいたい「演習」にそった。が、筆者としては文法学習の年間計画を次のように立てた。

1学期中間テストまで	動詞その1
〳 期末	〳 動詞その2
2学期中間	〳 形容詞・形容動詞
	過去・完了の助動詞
〳 期末	〳 推量の助動詞
3学期	〳 敬語・助詞

この計画にそって「演習」の文章を使った。全体としては予定時間内でできたが、反省として、

①1学期の動詞の練習問題をもっと授業内でやりたかったし、

②3学期の敬語をもっと時間を取りたかった。

ただしそのためには、あと年間で7、8時間の授業を必要とするため、仕方ない部分もあろう。

3 低学力生徒の対策

(1) テスト作成の工夫

先程ものべたが、本校の生徒層は学力差が甚だしいため、どうしても低学力生徒の対策を考えなければならない。初めの目標としては、最低でも学年平均点の半分は取れるようにテスト作りを目指した。そのため次のようにテストを作成した。

①文章を使った問題で60～70点分作る。内容理解の確認、訳などが中心になる。

②30～40点分で全くの文法問題。それもテストに出すと公約し、活用表などを丸暗記させる。

こうすることで、古文の苦手な生徒には主に②の学習をさせ、ある程度点数が取れるようにした。

(2) 個別指導

学力不振の生徒が各クラスに1～2人はいるが、授業が終わったらその生徒を呼び、ノート確認、宿題を

出すなどの指導をした。この方法はあまり教師の負担にもならないし、生徒にとっても全く古文から逃げるというわけにもいかず、良い結果を生んだ。例えば1学期中間テスト35点以下の生徒A～Cは、1学期末まで個別指導の対象になったが、その生徒の以後のテスト得点の変動を見ると、次のようになる。(数字は点数)

	1・中	1・期末	2・中	2・期末	3・期末
A	34	41	32	53	27
B	29	50	45	71	38
C	30	46	48	43	27
学年平均	68	60	50	59	46

やはり最初の指導で、どうにか1年間古文の授業を乗り越えると言えるのではなかろうか。

4 高学力生徒の対策

今回、学習能力の高い生徒の対策も考えた。

(1) テスト作成の工夫

先程、独立した文法問題を30～40点分テストに出したと述べたが、そこに応用問題も出してみた。ねらいは生徒が50分というテスト時間を余らせないということと、高学力の生徒を授業で習ったことの応用した学習に向けるためである。ただし、点数配分は少なくした。形式としては生徒にとっては初めて目に触れる文章を出し、助動詞や敬語などを答えさせるものである。

(2) プリント提出

授業は文法中心になるので、どうしてもまとまった文章が読めない。そのため2学期は高学力の生徒7～8人、プリントを渡し、文章を読ませたり、問題を解かせたりした。生徒がそのプリントを解いてくれば、次のプリントを渡した。だから提出しなければそれで終わってしまうのだが、ほとんどの生徒が1週間に一度提出した。そして一人を除いてほぼ全員が2学期の終わりまで続いた。

Ⅲ 補助教材を使った授業

今回、主に二冊の補助教材を使って授業をしたわけだが、ここでその補助教材を中心に行った授業のねらいと、反省すべき点を述べたい。

1 ねらい

(1) 「導入」の問題

1学期最初、古文の導入時期にはどのような教材で、どのような授業をしたらよいか。

いくつかの教科書を見ると竹取物語など分かりやすい文章をのせ、その下に訳を付けている。しかしその全訳の部分が終わると、次からは訳なしの注のみになる。つまり教科書編集者は「全訳」をもって古文導入と考えているのだろう。

しかし、考えてみれば全訳付きの古文学習は中学か

らの続きであり、要するに中学の学習を高1の最初に行うだけではなかろうか。もっと良い導入方法はないだろうか。

さて話は変わるが、新潮社の新潮日本古典集成が人気あると聞いたことがある。理由は本文の横に赤字で訳が付いていて読み易いということらしい。読んでみると確かにそうだ。実は筆者が高1の古文授業に「演習」を選んだのもこれが大いに関係する。

本文の横に大事な所、分かりにくい所だけ、最低限訳を付ける——こんな方針を取っている教科書は、何冊か調べてみたがなかった。なぜだろう。「演習」ではそうなっていて、それがこの問題集を使った第一の理由だ。

本文の横に訳が付いていて良い点は、まず見やすいということだ。これが本文の下にあると視線が動いてどうにも忙しい。

それから例えば、古文授業の導入の文章としてよく使われる竹取物語の最初の方に「子となり給ふべき人なんめりとて、手にうち入れて家へ持ちて来る」とある。ここなどは傍線部は訳を付けたい。そしてどうしてそう訳すのかは古文導入時期には説明しなくてもよいと考える。が、その他のところはしっかりと訳せるようにする。——と、これは一例だが、生徒の理解段階に合わせた部分訳を本文の横に付けておくのは授業しやすいつと考えたのである。

(2) 短い文章

教科書ではどうしても一つのまとまった話をのせるため、文章が長くなってしまふ。これでは文章そのものの面白さを感じない生徒には、読解の苦痛が長引くだけになるのではなかろうか。それよりも、短くまとまった文章をたくさん読んでみるのもよいのでは、と考えた。

(3) 体系的な学習

受験を考えるならば、高1で基礎的な文法事項を体系的に学習させたい。そのためにはやはりそのように編集された教材を使うのが一番であろう。

2 問題点・反省すべき点

(1) まず、特に2学期以降、ノートに書かない生徒が現れてきた。補助教材を二冊使っているのだが、二冊とも問題の答えは書き込むようになっている。そのため横着な生徒は、次第にそこに授業の説明なども全部書き込むようになってきたのだ。

(2) 「演習」中心に授業をするのだが、新しく出て来て文法事項はそのつと「レッスン」を開かせ、関連部分の練習問題をやらせた。そのため、生徒はその指示を聞き漏らすと、今どの問題集の何ページをやっているのかが分からなくなってしまう。そんな混乱が時々あった。

(3) 授業進路や、生徒の学習理解度を考えると「今の段階では、このことはまだ教えたくない」という部分、時々補助教材の問題や説明の中に出てくる。しかし、教師も生徒もどうしてもそこが気になり、生徒は答えを要求したり、教師もつい時間が無いにもかかわらず、説明しすぎて結局理解できなかった、ということが何回かあった。

例えば、生徒のよく理解できなかった所として「助詞の種類の見分け方」「『き』と『けり』の違い」「順接・逆説・仮定条件」「敬語法」などである。特に「敬語法」は高1の段階では「誰への敬意か」を重点に教えるべきだと反省させられた。「誰からの敬意か」という問題は高2で教えるべきでなかろうか。

以上いろいろと述べてきたが、要は補助教材の内容をいかにその学校の実情に合わせて使うか、ということである。

IV 今後の課題

ここまで昨年度の実践を述べてきたわけだが、最後にこれからの課題を述べ、終わりとしたい。

さいわい昨年度実践した学年を持ち上がりで担当することになった。現国と古文を交互に教えることになっている。今年度は教科書にそってオーソドックスな授業をしているわけだが、今年度が終わるときに、生徒にアンケートを取る予定である。昨年度のような授業と今年度を比べ、どちらが良かったのか。こうした追跡調査の結果は来年度の紀要で発表の予定である。

Ⅲの2の「反省すべき点」で述べた問題は、新たな本校独自の補助教材作りに向かわせる。つまりⅡの2の(1)は補助教材の中に白紙を多く取り、ノートをも兼ねさせればよいわけであり、(2)、(3)の問題はそれこそ補助教材作成者の腕の見せ所になるだろう。

古文指導はどうしても画一的なものになりやすい。しかし、各学校に応じて生徒の学力層は違うはずである。こうした生徒を教えるためには学校独自の古文指導があってしかるべきである。これからも本校生徒の実情に一番合った、高1古文の指導方法を模索していきたい。